

もっと元気な山形へ

山形商工会議所議員
企画委員会委員長
川合 勝芳氏



山形県、山形市などに対する平成26年度の山形商工会議所意見・要望事項がまとまり、実現に向けて動き出しました。各部会はじめ会員の皆様が多くのご

意見、要望を寄せてくださったことに企画委員会委員長として感謝申し上げます。新規項目が数多く、中小企業対策、中心市街地の活性化と街づくり、公共施設設備等々28項目の一つひとつに自らが参加し実現したいという思いがひしひしと伝わってきました。

委員長という立場で私見を述べることに、少々ためらいがありますが、私の経験を踏まえて、山形の活性化についての考えを紹介させていただきます。山形商工会議所青年部時代、私は先輩諸氏とともに日本一の芋煮会フェスティバル創設に携わりました。会えばいつも「山形を元気ある街にするため、自分たちができることは何か」「多くの人があつと驚く事はできないか」。侃々諤々(かんかんがくがく)議論を重ねていました。

そうした時、新関芳則氏(丸八やたら漬代表取締役社長)、佐藤善三郎氏(乃し梅本舗佐藤屋専務)らが、下関市で開催の青年部全国大会参加案内チ

ラシに、もてなしとして紹介されていた「ふぐちりの大鍋」を見て「これだ！山形名物の芋煮を大鍋でやろう」とヒントを得て、高橋雅宣氏(ハイススタッフ代表取締役)ら青年部の仲間と呼び掛け、あれよあれよという間に実現に至りました。私は燃料(薪)部門を任されました。語り尽くせぬほどのエピソードがあり懐かしい思い出です。引き継いだ後輩たちが、今や全国ニュースとなる大イベントに育ててくれました。

成功の理由を考えますと、一つは大鍋という奇想天外な発想です。もう一つは山形産物という地元の技、地元の食材を使うという地産地消への取組みです。そして最も重要なポイントは、山形人に愛されてきた山形ならではの「地に足の着いたイベント」だったからではないでしょうか。今回の街づくりに関する要望には「蔵(土蔵)保存による景観形成」と「御殿堰の整備延伸」が新たに寄せられました。先人が遺した文化、自然、風土に根ざした他の所では真似のできないものを守り、新たな発想で再構築し発信することが大切ではないか、ということでしょう。

私は「山びこ学校」で有名な上山市狸森(むじなもり)で生まれました。山形工業高校を卒業し設計事務所に勤めた後、山形駅前で「スカイブルーNo.1」という飲食店を開き全国展開を目指したが失敗。上山市農協の参事だった父勝太郎が、昭和51年に知人の息子に懇請され資金を提供し設立した曙印刷に入り今日に至っています。もっともその息子は多大な借金を残したまま別の印刷会社を立ち上げ、やがて行方知れずとなりました。

父は保証弁済を強いられ20年間無給。軍人恩給で生計を立てていました。それでも「長い人生には誰しも浮き沈みはあるもので、沈んだ時はどのように対処するか。人間の幅を広げ、飛躍の糧となって尊敬される人物になるか、そのまま朽ち果てるか、大きな分かれ道になる。会社をつくれば事業費用のほか社員の生活がかかっている。まずはその手当てをしたのち、自分の事を考えるのが経営者の責任だ」と自著『負けてたまるか！』に書き記したように、へこたれることなく、生来の面倒見の良さで慕われ、94歳の今もかくしゃくとしております。

この父の姿と青年部時代の仲間、大好きなバレーボールや日々の仕事を通じて知り合った多くの方々を私の財産です。企画委員長1年目。会員皆様の思いを肝に銘じて「もっと元気な山形づくり」を目指し、決意を新たにす次第です。

(曙印刷代表取締役)